

No. 320【2018年8月24日配信】

風倒木痕 (担当: 児玉)

こんにちは。文化財課の児玉です。暑い夏もやっと、涼しくなりだしたと思ったら、秋の台風シーズンの到来ですね。

遺跡の発掘調査では、地面の変化を見極めて、時代やそこに建物や墓などの遺構の存在を判断しながら進めていきますが、たまに台風などで樹木が根こそぎ倒れた痕跡が見つかることもあります。<sup>ふうとうぼくこん</sup>「風倒木痕」と呼ばれるものです。

通常、建物や墓などの人工的な遺構は、黄褐色系の地面に対して、黒褐色系のシミの広がりで見出すことができます。一方で「風倒木痕」は1m内外の黄褐色系の土のまとまりを、黒褐色系の土が囲んでおり、その断面は黄褐色系の土のまとまりの下に、黒褐色系の土がもぐり混んでいます。

遺跡の地層は本来、黒褐色系の土が上部で、黄褐色系の土が下部にあるはずなのですが、なぜ「風倒木痕」の土層は逆転しているのでしょうか。

その過程を復元してみましょう。

(1) 立っていた木が根こそぎ倒れると、根とともに根に付着した土が地表に現れます。つまり、黄褐色系の土のまとまりが浮き上がるのです。

(2) 元々、根が張っていた部分に、大きな空洞が生じます。その後の雨などで、地表面の土が空洞の中に流れ込みます。つまり、黄褐色系の土のまとまりの下に黒褐色系の土がもぐり込むのです。

(3) やがて、木は腐ってなくなり、土だけが、後々まで残ることになり、この結果が、発掘調査で確認されるわけです。

いつの時代も台風は災害をもたらす厄介ものであり、自然現象とはいえ困ったものです。